

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2018 佐々木伸雄

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

学術俯瞰講義

ワンヘルスの概念で捉える健全な社会

伴侶動物と人間社会

佐々木 伸雄

(東京大学名誉教授、獣医外科)

2018, 11, 9

本日の講義

- 履歴：獣医外科医としての経験、獣医学と社会
- 伴侶動物の家畜化
 - 1) 犬
 - 2) 猫
- 高齢化社会とペット
- 社会とペットー動物愛護・福祉ー

履歴

- 1971年：東京大学獣医学科卒
- 1976年：同 大学院博士修了
- 1976年：同 農学部獣医外科学教室助手
- 1980,12-1982,2：カリフォルニア大学ロスアンジェルス校医学部研究員
- 1984年：東京大学、獣医外科、助教授
- 1988年：ザンビア大学客員教授(3ヵ月)
- 1993年：東京大学教授(2006年～動物医療センター長)
- 1998年：米国コーネル大学客員教授(6ヵ月)
- 2012年：東京大学定年
- 2014年：一般財団法人日本生物科学研究所(2年)
- 2014年：タイ、カセサート大学客員教授(2.5ヵ月)
- 2014年10月：倉敷芸術科学大学客員教授
- 2014年11月～動物看護師統一認定機構長
- その他の現職：アイメイト協会評議員、ジャパンケネルクラブ理事、
NPO法人 高齢者のペット飼育支援獣医師ネットワーク理事長

人と関わりある動物

- **伴侶動物(愛玩動物)**: 犬、猫、その他家庭で飼育される動物など
- **家畜**: 食用など、人間社会が利用できる動物
- **実験動物**: モルモット、ウサギ、ネズミ(マウス、ラット、など)、ミニブタ、など
- **野生動物**: いわゆる野生動物、動物園動物(展示動物)など

伴侶動物とは？

- 犬や猫
- 小鳥、魚、小型ほ乳類（ハムスター、モルモット、ウサギ、フェレット、など）
- その他のペット（トカゲ、ヘビ、その他の野生動物）
- 欧米では、馬も伴侶動物として扱われる
- 人がこれらの動物を飼育することで癒される、楽しむ、生活が充実する、など
- ただし、野生動物を放し、これらが外来動物として社会問題となる例も多い

ワカケホンセイインコ



家畜とは？

- 様々な目的、必要性により、人間社会が求め、その目的にあわせて品種改良を行い、固定した動物
- 最も古い家畜は犬
- その他に、猫、牛、馬、豚、鶏、羊、ヤギ、など
- その中で、犬や猫は伴侶動物（愛玩動物）としての役割が主体

獣医外科医としての経験

- 主として犬や猫の外科疾患の診療（東大、動物医療センター：VMC）
- 現在は動物種、あるいは疾患別に専門家してきたが、我々の世代は全ての動物の診療に関与
- 馬の外科疾患、牛の多くの疾患、時には動物園動物など

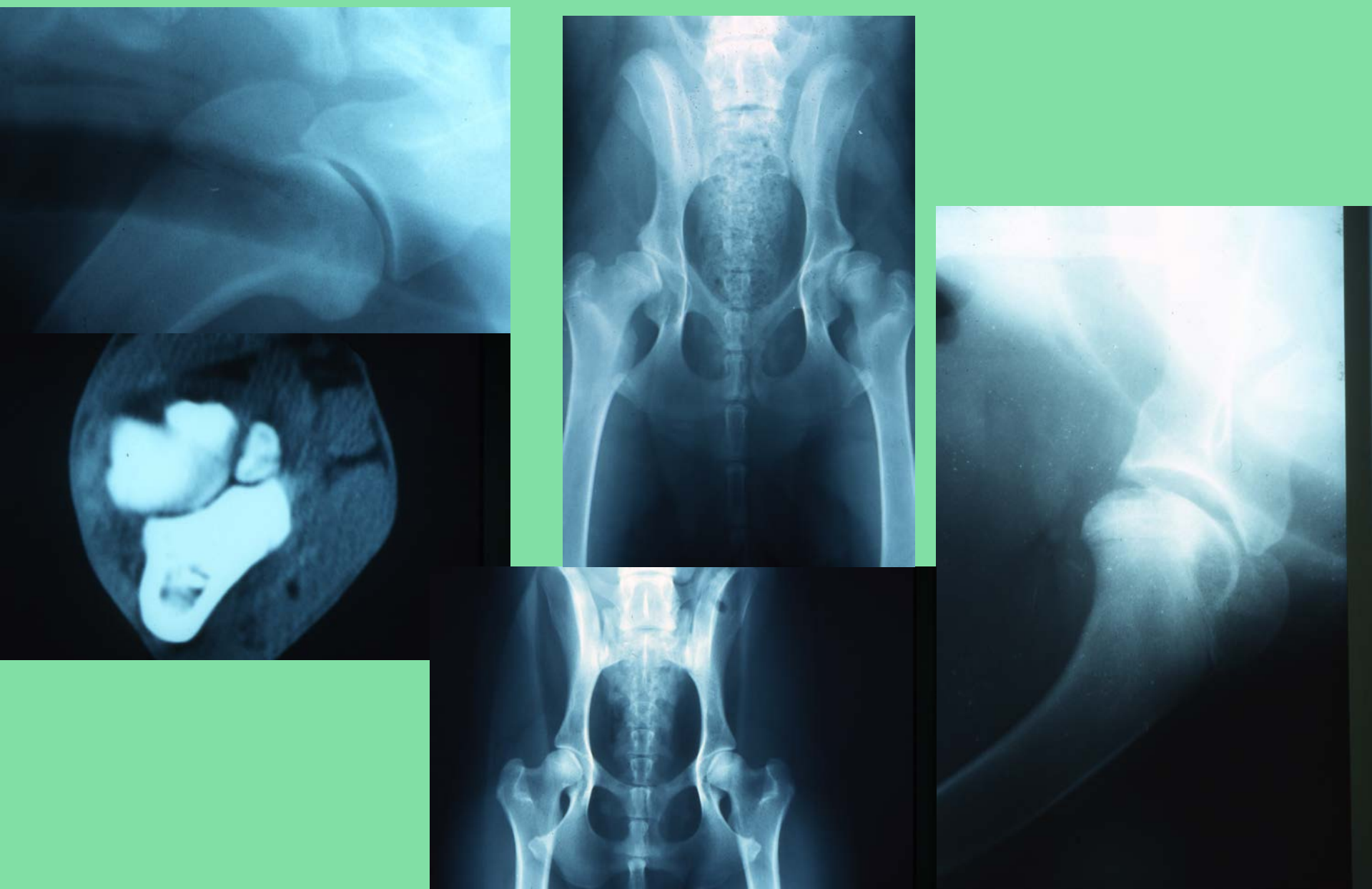
東大VMC診療の実情

- 小規模: 専門分野化が不十分
- 受け入れ可能な症例数が不十分
- 救急症例の受け入れはほぼ不可能に近い
- 夜間救急は全く受け入れていない
- 先生方は不眠不休で研究や教育に関する時間的余裕がない
- モンスター飼育主も増加傾向にあり、その対応も頭が痛い

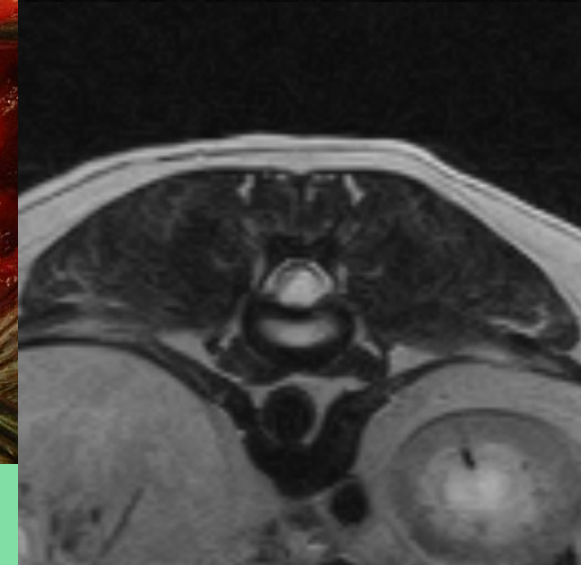
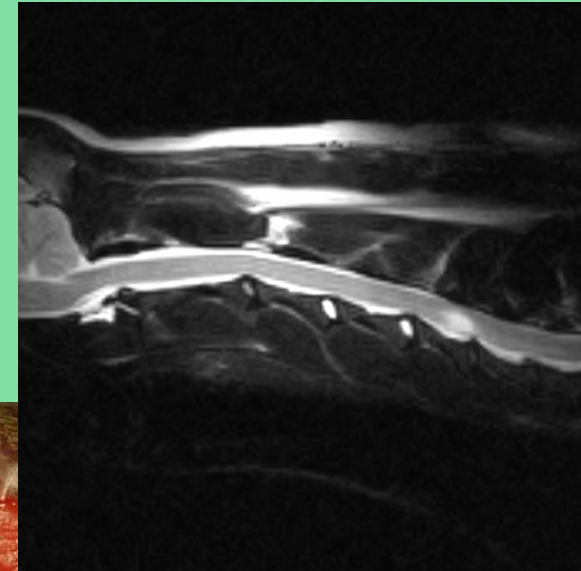
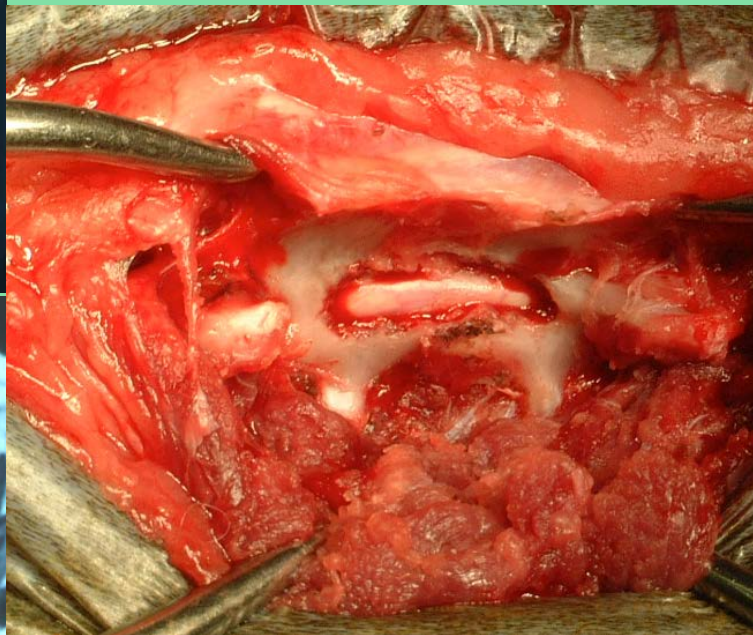
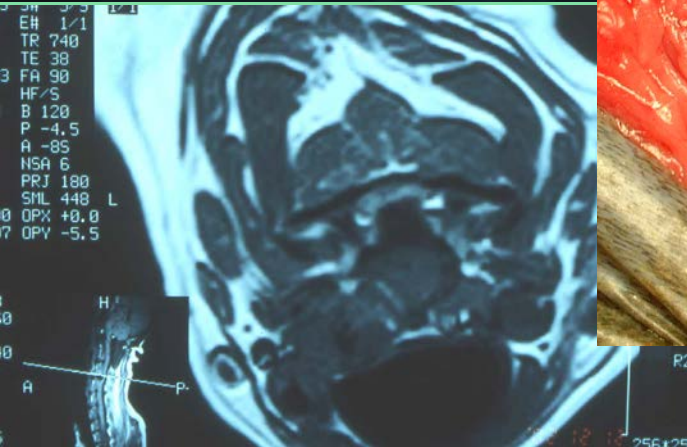
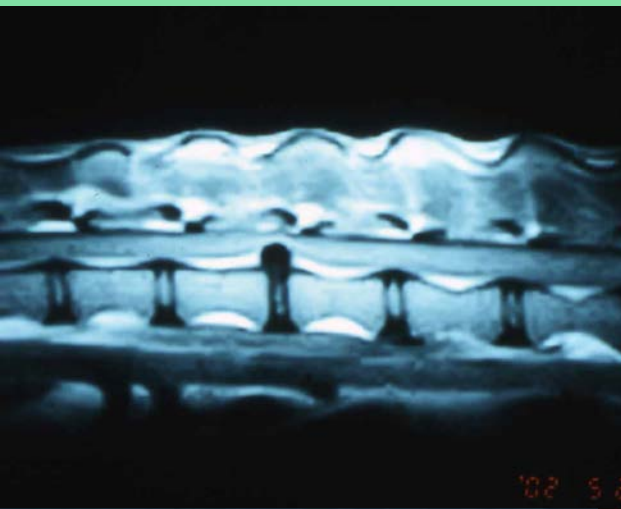
他大学の動物診療施設

- いずれも二次診療：紹介症例を中心に診療
- 私立大学はかなり診療科を細分化しているが、必ずしも十分なスタッフが配分されていない（専門家1名による専門診療科）
- 一般的には地域の中心的役割を担っている
- 分野によっては、大学の診療が地域から信用されない

関節疾患



脊椎・脊髄の疾患



犬の乳がん



産業動物臨床（特に牛）に関わる問題点

- 大多数が農業共済組合の診療所に所属
- 畜産業の発展に大きな貢献
- 獣医師は農業（畜産業）に貢献しているという意識があり、それが大きなモチベーションになっている（女性獣医師も増加している）
- 家畜の保険料は政府が半額補助
- 診療手順、使用できる薬剤などは農水省が決める（医学の保険点数と同様）
- =診療の自由度は大きくない
- =農家は納めた保険料を回収したい

第四胃手術



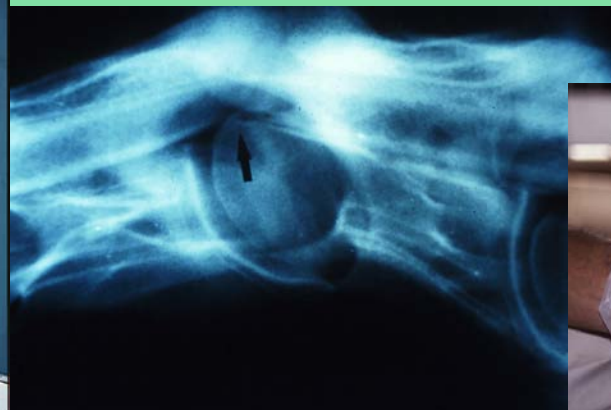
帝王切開(96kg !)



鼻鏡断裂



牛の第四胃フィステル



伴侶動物の家畜化

動物の家畜化： 動物の赤ちゃんが ペットに移行？

by Bill Ebbesen, from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%B3#/media/File:Cub_chewing_on_a_piece_of_bark_with_mother_in_2009.jpg
CC BY 3.0



by 松岡明芳, from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%82%B3#/media/File:2016-06-14_Orange_and_white_tabby_cat_born_in_2016_%E8%8C%B6%E3%83%88%E3%83%A9%E7%99%BD%E3%81%AD%E3%81%93_DSCF6526%E2%98%86%E5%BD%A1.jpg
CC BY-SA 4.0



by 松岡明芳, from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%82%B3#/media/File:2016-06-12_Orange_and_white_tabby_cat_born_in_2016_%E8%8C%B6%E3%83%88%E3%83%A9%E7%99%BD%E3%81%AD%E3%81%93%E5%AD%90%E7%8C%AB_2016%E5%B9%B4%E7%94%9F%E3%81%BE%E3%82%8C_DSCF6403%E2%98%86%E5%BD%A1.jpg
CC BY-SA 4.0



犬は人のいちばん古い友達

by David Merrett ,from Wikipedia Commons

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%BC%E7%A8%AE#/media/File:Middle_White_Sow.jpg
CC BY 2.0



by Fruggo ,from Wikipedia

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%B7#/media/File:Koe_zijaanzicht_2.JPG
CC BY 1.0



宮寺氏の原図(許可を得て掲載)を一部変更

by 竹之内 惇,from Wikipedia Commons

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%AF%E3%83%88%E3%83%AA#/media/File:Ryujin.tif>
CC BY-SA 4.0



年前

15,000

10,000

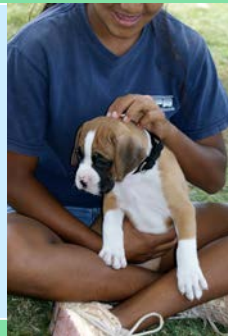
5,000

0

by Laurentine ,from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%BB%E3%83%89%E3%83%83%E3%82%B0#/media/File:Berger_allemand_en_montagne.jpg
pg
CC BY-SA 3.0



by Ozone9999,from Wikipedia Commons
<https://flic.kr/p/4ZpvBp>
CC BY-NC-ND 2.0

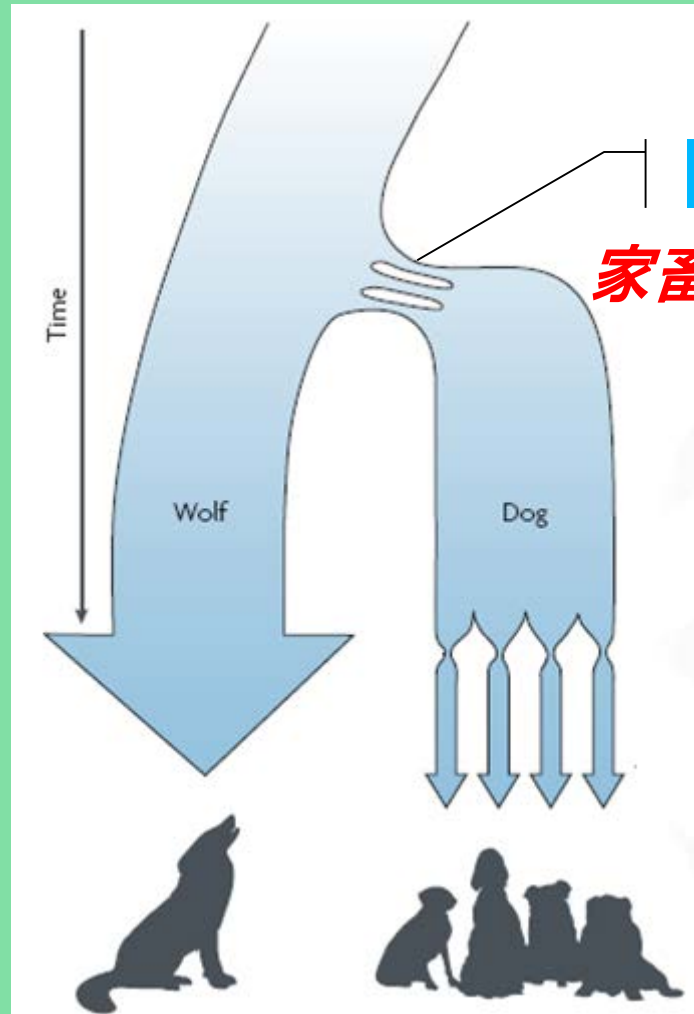


オオカミから犬へ

オオカミ遺伝子プール



by Rsa ,from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%82%AA%E3%82%AB%E3%83%9F#/media/File:Maruyama_Zoo_Canis_lupus_occidentalis_001.jpg
CC BY-SA 3.0



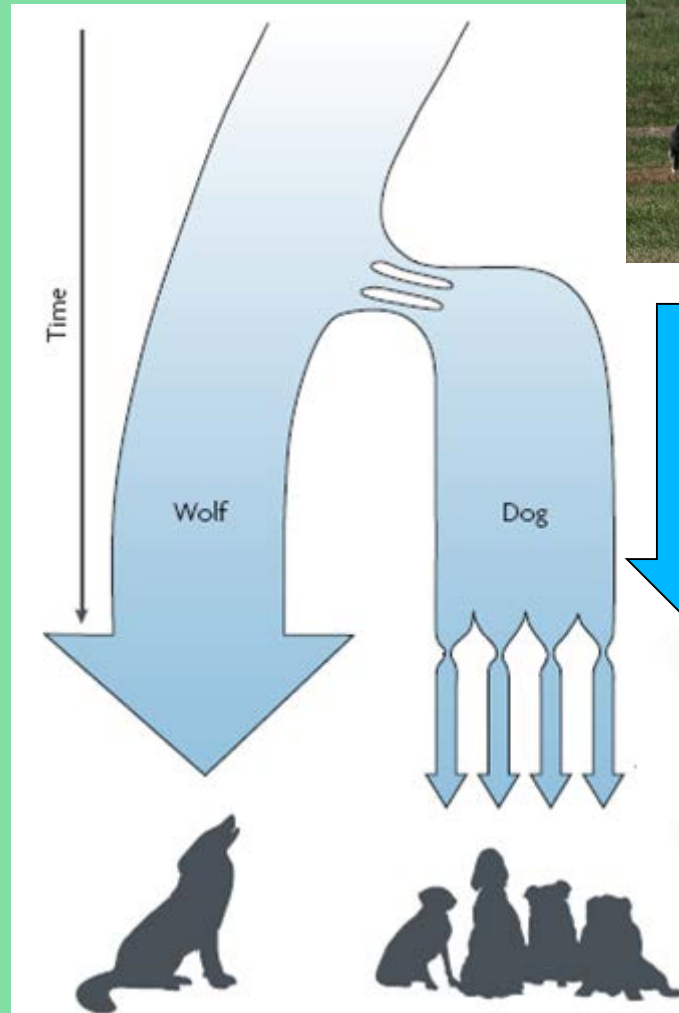
遺伝的ボトルネック 1

家畜化 約15,000 年前

宮寺氏の原図(許可を得て掲載)を一部変更

目的に応じた形態・性質の改良

宮寺氏の原図(許可を得て掲載)を一部変更

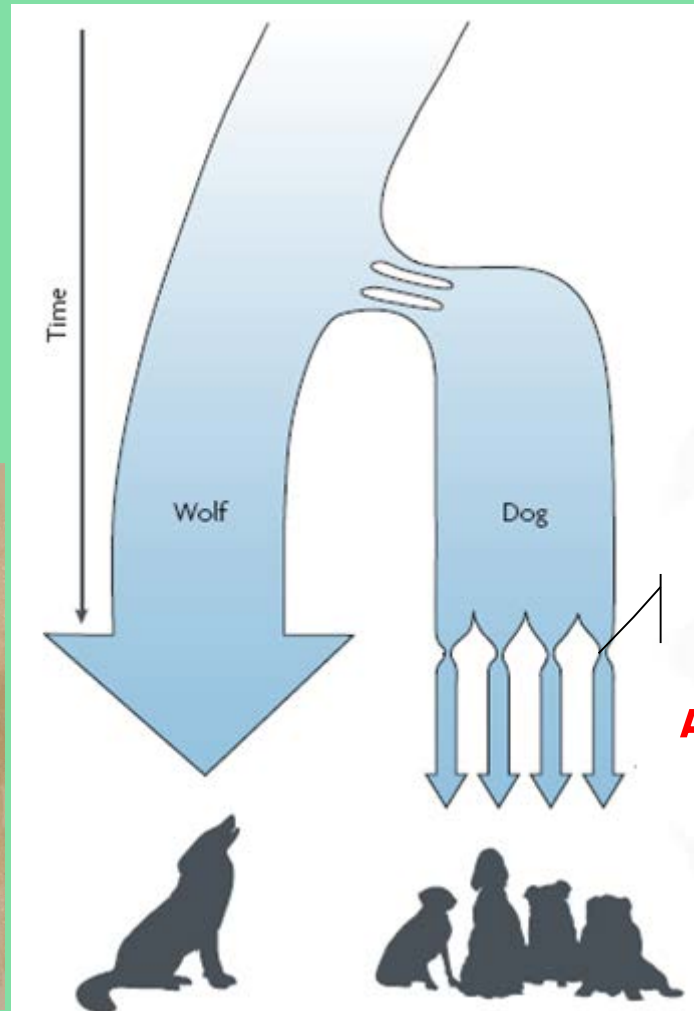
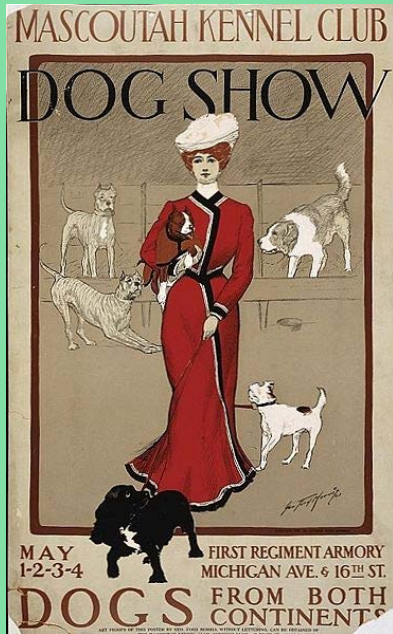


by Scot Campbell, from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%8C#/media/File:Border_Collie_sheepdog_trial.jpg
CC BY-SA 2.0



純血犬種の誕生

宮寺氏の原図(許可を得て掲載)を一部変更



遺伝的ボトルネック 2

品種化 約100年前

人は何故犬を飼うか？

- かわいい、癒される
- 嘘をつかない、常に真剣に家族に向き合う、共同生活者、等
- 使役犬(牧羊犬、番犬、補助犬、等)
- 競技(アジリティ、等)を楽しむ
- ステータス、自分の所有物:一時期日本でもあったかもしれない、現在中国ではその傾向
- 中産階級の増加とペット数は比例？(現在の東南アジア)

現在の家庭における動物の役割

- 家族の重要な一員
 - 時にペットへの過度の依存？ —
- 「子はかすがい」から「ペットがかすがい」
 - 夫婦間、家族間ではペットの話題がもっとも多い？ —

by Randifredricks ,from Wikipedia Commons
https://en.wikipedia.org/wiki/McNab_dog#/media/File:Red_and_White_McNab_Shepherds_Kye_Aila.jpg
CC BY-SA 4.0

by ミウラトコロザワ, from Wikipedia Commons
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%89%E3%83%83%E3%82%B0#/media/File:%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%89%E3%83%83%E3%82%B0.jpg>
CC BY-SA 4.0

by Chunbin, from Wikipedia Commons
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9A%E3%83%83%E3%83%88#/media/File:Pomeranian-tb2.jpg>
CC BY-SA 4.0



犬の飼育が人に及ぼす影響

- 犬の飼い主、特に男性は、非飼い主に比べ、血圧、血漿トリグリセド、血漿コレステロールが低かった。
- 女性でも40歳を超えた場合、犬の飼い主の血圧が有意に低かった(これらはオーストラリアの研究)
- 犬と良い関係を持つ人では、幸福感と関係するオキシトシンというホルモンが多く分泌される。
そのとき犬でもオキシトシンが上昇する
(麻布大、菊水教授)
- 犬と目を合わせる:お互いに視線で意志を伝えることができる(オオカミではそれが出来ない)、これが犬とオオカミの大きな差か？)
(菊水教授)

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた
画像を削除しました

書籍の表紙

井上こみち『氷の海を
追ってきたクロ』(学研プ
ラス、2010年)

<https://hon.gakken.jp/book/1020328100>

品種改良

- おそらく必要に応じて、少しずつ犬の品種改良は行われた
- 狩猟、牧畜の発展
- ルネサンス以降の貴族社会における愛玩犬
- これらに関する研究は、最近の遺伝子解析技術の進歩により、大きく発展
- 縄文人と弥生人：北海道犬と薩摩犬の遺伝子解析結果が比較的類似する??
- 日本犬は他の犬種に比べ、オオカミと遺伝形質が類似

遺伝的均一性

- ある特定犬種/品種に多い疾患が多数報告されており、その中には、人の遺伝的背景をもった疾患と共通するものもある(遺伝的共通性?)
- 現在この分野は非常に注目されており、今後の重要な課題、医学との共同研究に繋がる
- 遺伝的になりやすい疾患:
 - 大型犬:股関節形成異常
 - ミニチュアダックスフント:
 - 椎間板ヘルニア、免疫介在性関節炎、免疫介在性皮膚疾患(種々)、脛骨湾曲症、網膜変性等

動物の遺伝性疾患と人の病気

- 犬や猫だけでなく、多くの家畜に人と病態等が共通する疾患がある
- マウスなどで人工的に作成された疾患モデルも病態の解明や治療法の開発に多大な貢献をしている
- 自然発症の疾患には、より人の疾患発生と共通する因子が多く、今後医学と獣医学の連携が重要である(ワンヘルス)
- 犬に比較し、猫では各国・地域により疾病の発生率が異なる傾向にある(人種間の差異と類似)

猫家畜化の歴史

- リビアヤマネコ
 - 人との生活の証明: 9500年前
(キプロス島)
 - 猫は何故人との共生を求めた
か? (農耕の発達、穀物の存在)
- エジプトでの猫(4000-5000年前)

by Sonelle, from Wikipedia Commons
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%83%93%E3%82%A2%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%83%8D%E3%82%B3#/media/File:AfricanWildCat.jpg>
CC BY-SA 3.0



著作権等の都合により、
ここに挿入されていた
画像を削除しました

人と一緒に埋葬された
猫の骨の写真

猫の歴史

by Mogadir, from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E8%8B%B1%E5%8D%9A%E7%89%A9%E9%A4%A8#/media/File:BM_EA_6752,_26847_-_01.JPG
CC BY-SA 3.0

#紀元前1000~200年頃

エジプトから他の国に猫が広まっていった
(シルクロードの存在)?

#5~15世紀:

猫は魔女の手先
として迫害される

#日本には、奈良時代
に輸入された?

#平安時代以降、多くの書物に猫が
書かれている



猫の飼育

- 韓国では最近まであまり猫が好まれず、飼育数は少なかった
- 一方イスラム圏では、犬が不浄な動物と考えられ、猫が好まれる傾向にある
- 猫は一般に複数の個体が飼われる傾向にあり、犬とはその点がやや異なる
- 昔に比べ、家庭内のみで飼育される個体が多くなってきた(約70%)が、地方では依然として外に遊びにでる個体も多い

猫の飼育

- 一般に猫は独立精神が高く、また犬よりも環境へなつく割合が高い(犬よりも場所が変わることになじみにくい＝旅行へ帯同しにくい)
- しばしば「野良猫」ないし「地域猫」と呼ばれる猫が存在する
- これらの猫はしばしば住宅内に糞尿をする、ダニ、のみ等の感染源になる、鳥類を捕食する、といった点から問題視される
- これらの猫を捕獲し、去勢や避妊手術をすることに自治体の補助がしばしば行われている

タイにはお寺が非常に多い



野良犬—どこにでもたくさんいる



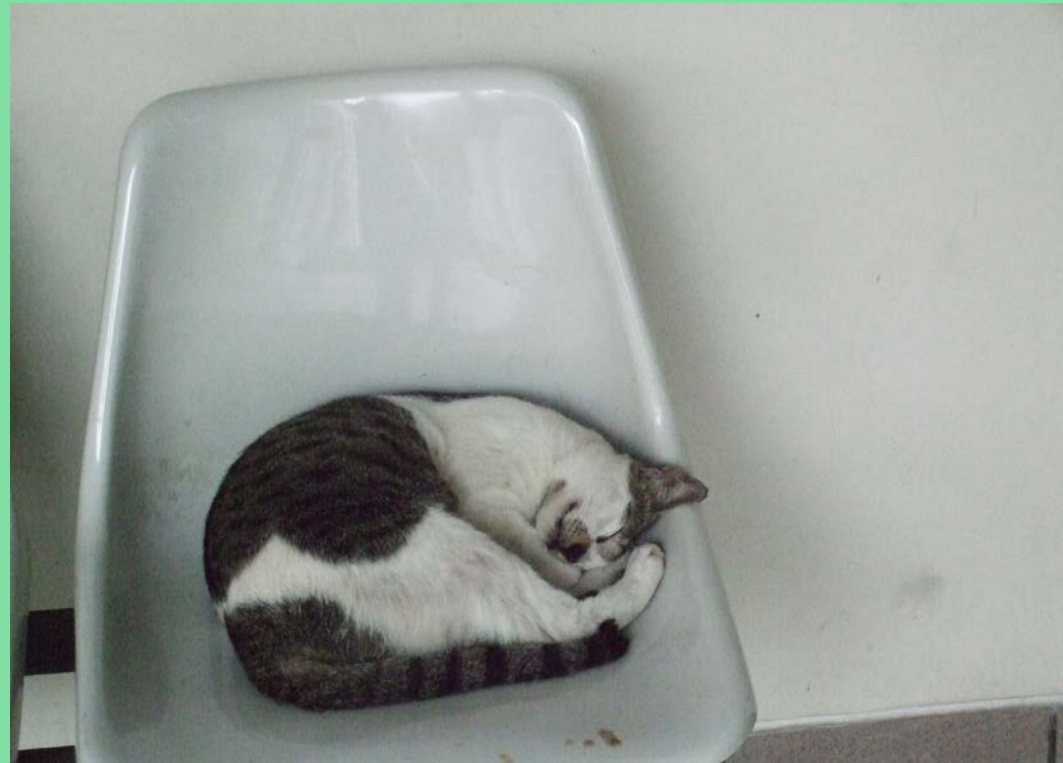
Dog Shelter



インドネシアの野良猫



ボゴール農科大学、動物病院内
イスラム圏は猫？



小笠原諸島における猫対策

- 希少動物であるメグロ等の野鳥を捕食
- 元々は野良化した猫にエサを与えていた住民がいた(売り物にならない魚を漁港で与えていた、さらに定期的にエサをあげる住民がいた)
- 東京都獣医師会が年1回訪問し、捕獲猫の避妊、去勢を実施
- 小笠原村では、猫に対しても登録制度を導入

野良猫対策

- これらの猫にエサをあげないと死んでしまう、という危機からエサを常時あげる人がいる
- そのためにさらに繁殖によって新たな野良猫が出現する
- 相互に問題点を話し合い、野良猫の存在が犬や猫の病気(のみや感染症)や社会的な問題を引き起こすこと、**野良猫の寿命は、家庭内で飼育されるより短いこと、等を認識し合う**
- その上で、その地域での最良の解決策を話し合う(なかなか簡単ではない)

高齢化社会とペット

著作権等の都合により
ここに挿入されていた画像を削除しました

犬と猫の飼育頭数グラフ
2017年犬892万匹、猫953万匹

飼育頭数(犬、猫)の現状

- 2008年以降、犬の飼育数は徐々に減少傾向
- 猫の飼育数はほぼ横ばい:平成17年には犬の飼育数を上回る
- 犬猫合わせて1900万頭を割り込む
- 動物関連業界では、将来の動向に大きな危機感を持っている:ペットフード、ペット用品、ペット用薬剤、獣医師、動物看護師
- しかし、現在のところ、動物看護師の不足が顕在化している(勤務獣医師も募集して応募がない地域が多い)

朝日新聞記事

日本の犬の飼育状況

- 戦後：多くが番犬として飼育されていた：日本犬の雑種、スピッツ、等
- 経済成長とともにマルチーズ、ヨークシャーテリア等が多く飼育された
- 映画、テレビ等の影響、あるいはある種のブームにより特定品種が飼育される傾向
シベリアンハスキー（南極物語）、ラブラドル、ゴールデンレトリバー、など大型犬がかなり多く飼育された
- 一時期にその品種が多く飼育されると、しばしばその犬種に関わる特有の疾患が増加
- 現在は、チワワ、ダックスフント、トイプードルがブームとなっている

生活とペット

- ストレスの多い社会におけるペットの役割
- 子供の教育と動物の飼育
- 動物を飼う環境の整備
- キーワードは高齢化社会の進行
- 高齢者のペット飼育の効果
- 高齢化社会における獣医師と動物看護師の役割

臨床家としての経験

- しばしば高齢の飼い主の方（特に70歳以上の方）が動物を亡くされると、「もう動物は飼えない、自分で責任持って世話する自信がない」という言葉が返ってくる
- 高齢の飼い主の方が動物を亡くされると、急に老け込んだり、元気がなくなったりする
- 家族の方が、「この動物が亡くなると、可愛がっていたご老人の健康が心配である、急にがっくり来ないか、気になる」、という話しをする

高齢者にとっての犬の飼育

- 毎日世話（散歩、エサ、下の世話、等）をしなければならない＝生活の張りやリズム、生き甲斐
- 散歩（歩くこと）は健康維持に重要
- お散歩仲間が出来る＝毎日顔をあわせると声を掛け合う：時には仲間同士の会話が弾む＝地域コミュニティ、見守り体制ができる
- 健康維持に役立つ

一人暮らしの高齢者

- ペットは話しかけると何らかの形で返事をする(会話が成り立つ)
- 毎日世話をしなければならない: 毎日の仕事ができる、生き甲斐につながる
- 犬であれば散歩をする: 飼い主同士の会話が増える、情報が入る、歩くことは飼い主の健康にもよい
- 健康寿命の延長！！

高齢者のペット飼育と健康

- 科学的裏付けが多く報告されている
- 65歳以上の高齢者(アメリカ)1,036人を対象
- 回答者938人:比較的ストレス(教育、結婚の有無、職業、収入、所帯状況、健康状態など)の多い人は1年間に10.37回病院に通院、これに対し、同じストレスの多い人で、犬を飼っている人は8.62回。猫や他の動物(トリなど)にはこの差が見られなかった。

犬飼育の高齢者に及ぼす好影響

- 13人(日本人:男10人、女3人)の高齢者(平均67.5歳)に30分、犬と散歩を1日2回行った。これらの人に心電図を装着し、交感神経系と副交感神経系の活動を示す波形の比率を測定した。
- その結果、犬と散歩していると、副交感神経系波形の比率が有意に上昇した。
- 同様に、自宅で犬と過ごす副交感神経系のは系比率が上昇した。
- 副交感神経系の波形は、リラックスしたときにより多く出現する

高齢者がペットを飼うときの不安

- 膝や腰が痛く、毎日の散歩や世話が十分に出来なくなる
- 認知症になり、世話が出来なくなるのではない
- 家族、親類縁者がそばにいない場合、体調を壊し、入院しなければならないときに誰に飼ってもらおうか？
- 老人施設に入るときに誰に飼ってもらおうか

往診（在宅医療、在宅獣医療？）

- 昔はお医者さんも獣医さんももっと往診をした
- 往診をしながら、飼い主さんの様子や、動物の飼われている様子や状況が分かった
- 必要な動物の世話や助言はそのときにできた
- 今は多くの獣医さんが往診しない
- 往診では、できる診療の範囲に限られる
- 毎日の診療が忙しく、往診に当てる時間がない
- 看護師さんにその役割をお願いできないか？

VESENA設立とその目的

- 平成21年12月にNPO法人高齢者のペット飼育支援ネットワーク(VESENA)を設立
- 高齢者にもっとペットを飼って欲しい
- 高齢者が不安なく動物を飼ってもらうにはどうしたらよいか
 - 1) 普段の飼育のお世話を獣医師や動物看護師が行う
 - 2) 万が一飼育が難しくなったとき、新たな飼い主を探す



—私たちVESENAの、3つの約束—

VESENAの活動は
高いモラルを基準にした
獣医師指導の大切な社会活動です。



VESENA (veterinarians for seniors and animals)

1. 高齢者のQOL向上のための社会貢献活動

2. シニアのためにペット飼育を支援する

3. ペットの将来のために新しい飼い主を探す

獣医さんのネットワークが なぜ重要か

- 高齢者の状況は、その方の飼っている動物を普段から診ている**獣医師**がよく知っている
- 獣医師は多くの**動物看護師**を雇用しており、彼らは動物の健康チェックや世話に関してはきちんと対応できる（また、奉仕の気持ちをよく理解できる）
- いざというときの**新しい飼い主候補**も身近にいることが多い（あるいは**その動物の情報**を持っているので、**新しい飼い主**を探しやすい）
- 高齢者自身およびその家族にとって、知っている**獣医師、動物看護師**であれば、自宅に入ってもらうことに不安が少ない

訪問ケアサポート の一風景(爪切り)



散歩支援:可能であれば
シニアの方と一緒に





VESENA活動



高齢者のペット飼育を推進する活動

- 多くの団体が活動している（ペットとの共生推進協議会＝多くの団体、動物関連業界、その他の団体が参画）
- 信託活動（ペット保険会社、信託銀行、その他）
- 多くは、もし飼育が継続できなくなった段階での新しい飼い主探し、あるいは一生動物の面倒をみる、という仕組みを考えている

高齢者のペット飼育推進 のための課題

- 多くの団体が活動しているものの、その連携がなされていない
- 愛護団体によっては、高齢者にペット飼育を進めていない＝きちんと世話が出来ない状況は動物虐待にあたる？？？
- 動物保護管理施設の多くは高齢者に新しい飼育者になることを認めていない＝高齢者にとっては、子犬、子猫より、きちんとしつけられた成犬、成猫の方が飼いきやすいのではないか、（理由として、動物収容施設に持ち込まれるペットのうち、かなりの数が高齢者からのものである、ということが事実としてある）

今後の飼育支援活動への提言

- 新たな支援システムを様々な団体（信託、保険などを含め）が連携して構築し、それを社会に広め、高齢者は自分の状況に応じたシステムを選択する
- 獣医師会が社会貢献活動のひとつとして、地域包括支援センター、介護団体等と連携し、支援の要望（動物の世話の支援、新しい飼い主探し）に応じて、動物看護師を派遣するシステムを構築する
- 獣医師会の支部は全国にあるため、それなりの支援の和が広がる

高齢者のペット飼育推進の課題

- 高齢者がペットを飼っているときに、例えば、認知症の状態や健康状態を確認するために見回り／見守りが出来るか？（高齢者あるいは周囲の親族等からの要請がない場合、非常に困難？）
- 介護団体との連携：介護団体からも動物の世話に関する要望がある
- あるいは地域包括支援センターに動物看護師等を常に配置する、あるいは情報を共有できる組織体制を構築する

今後の飼育支援活動への提言

- 国・自治体に支援を求めることは決して容易ではない（国は高齢者支援を推進するが、**ペット関連の事業に従来消極的**）
- 民間ベースで何らかの支援組織を構築できるか？（**資金、信頼性・透明性の確保**）
- そのような活動が社会から高く評価され、それが企業にとっても非常に大きなメリットになる仕組みが必要！

新しい飼い主／飼育施設 の課題—老犬ホーム協会の設立—

- 新しい施設で最後まで動物の面倒を見る、という団体に対する信頼性の確保:きちんとした施設、人員を配置しているか？: 本年(2018年2月)設立
- 適正な価格か？
- 自分のペットがその施設になじんでくれるか？
- 施設は常にオープンとし、世間から評価されるシステムを持っているか？
- 高齢者が時々訪問して自分のペットと会えるか？
- これらの条件を満たすことを考えると、かなり高額な金額が必要？

新しい飼い主／飼育施設 の課題

- 臨床家がこれらの動物を長く受け入れることは困難
- 動物収容施設に全て預けることは不可能
- それ以外の団体で、動物を様々な形で扱っている施設の情報公開（高齢者の動物を預かることが可能か否か）、ならびにそこで収容できる動物の種類、数について情報を共有する
- **すでに存在するが、高齢者が彼らのペットとともに入所できる老人ホーム等を増やす：老人の死後は、その動物を施設のペットとして飼育し続ける!!**

ペットと社会

—動物愛護・福祉—

動物の福祉

(アニマルウェルフェア)

- 全ての動物を飼育する上で配慮すべき項目として “Five Freedoms” が提唱されている:
この項目は、家畜であっても同様である＝しかし、農家等の経営を考える上では、なかなか実施容易でないことも多い
- また、発展途上国においては、これの実施が困難なことも多い(人自体がこの5つの自由を獲得できていない)

動物の福祉-5つの解放 (5 freedom)

- 良い栄養を与える
- 病気や怪我をさせない
- 不快な感覚を与えない
- 普通に(正常に)行動させる
- 恐れや怖い体験をさせない

牛の福祉



農家への指導—経済的な 動機付けが必要

- 静かで、動物を怖がらせない環境（自信に満ちて、むやみに動物をたたかない行動）—乳量や増体重が増加する

乳絞りのときに何回排糞するか、排尿するか？

人がどこまで近づいたときに動物が逃げるか？

動物の快適性の判断

- 横臥している時間はどのくらいか？



動物の愛護・福祉

- 動物実験は必要か？
- 動物も苦痛は必ず感じている
- 必要最小限にするために何が大切か
- 犬、猫だけでなく、産業動物（牛、豚、鶏）にもできるだけ苦痛を与えない
- 動物の側に立って考える

国による動物福祉・倫理に関する 考え方の差

- ヨーロッパ・アメリカ系の国家：現在の動物福祉に関する考え方は、ほとんどがこれらの国で考えられている内容に沿ったものがスタンダードとされている
- 日本人の倫理・福祉に関する考え方と多少の差がある—宗教？歴史？
- 基本は、動物にも命があり、出来るだけ彼らの快適性を確保する飼育
- 最終的には人間の生活・事情が優先される？

ご清聴
ありがとうございました

